

# 子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

## 論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Exogenous oxytocin used to induce labor has no long-term adverse effect on maternal-infant bonding: Findings from the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

外因性オキシトシンのボンディング(対児愛着)への影響

ユニットセンター(UC)等名: 高知ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of Affective Disorders

年: 2021

DOI: 10.1016/j.jad.2021.11.058

筆頭著者名: 國見 祐輔

所属 UC 名: 高知ユニットセンター

目的:

日本においては、分別誘発に外因性オキシトシンが広く用いられている。近年、オキシトシンと母子愛着形成との関連が報告されている。本研究では、外因性オキシトシンを用いた分娩誘発と母から子へのボンディング(対児愛着)との関連を検討した。

方法:

エコチル調査において頭位、妊娠 37 週以上で単胎にて分娩誘発を行って出産した母親のうち、産後に赤ちゃんへの気持ち質問票(MIBS-J)への回答を行った 19,700 名を対象とした。ボンディングは MIBS-J を用いて調査した。MIBS-J は、出産後 1 カ月、6 カ月、1 年後に回答を行った。オキシトシンを用いた誘発分娩と、MIBS-J の各時期の合計値との関連を、重回帰分析を用いて検討した。

結果:

本研究の対象者のうち、外因性オキシトシンは 15,252 人(77.4%)に用いられた。交絡因子で調整を行った後、外因性オキシトシンを陣痛誘発に使用した群と使用しなかった群との間で、どの時期においてもボンディングに対する統計的な差は認められなかった。

考察(研究の限界を含める):

外因性オキシトシンの使用はボンディングの悪化につながる可能性が懸念されていたが、本研究では、外因性オキシトシンを用いた分娩誘発と、1 カ月後、6 カ月後、1 年後の母から子へのボンディングとの関連は認められなかった。この理由としては、外因性オキシトシンの投与方法や、母親の社会的背景による外因性オキシトシンの影響の違いなどが考えられる。研究の限界として、出産後 1 ヶ月と 6 ヶ月時点のボンディングは、MIBS-J の全問(10 問)ではなく簡易版(5 問)で調査されていたこと、投与量や投与時期など、陣痛促進剤の使用に関する詳細な情報が得られていないことが挙げられる。

結論:

外因性オキシトシンを用いた分娩誘発と、母から子へのボンディングとの関連はみられなかった。外因性オキシトシンは、陣痛を誘発するために広く用いられている重要な薬剤であり、長期的にボンディングに対する悪影響を与えないことが示唆された。